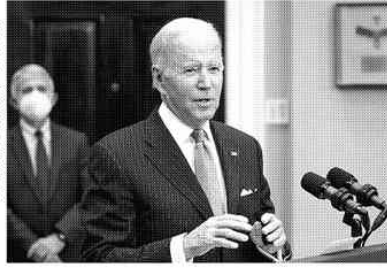
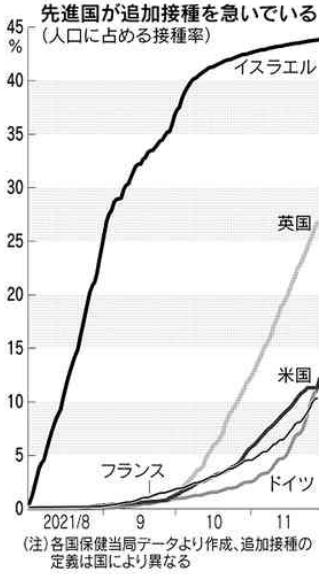


米欧、追加接種急ぐ

世界で感染確認が相次ぐ新型コロナウイルスのオミクロン型に対し、水際対策に加え、欧米各国が追加のワクチン接種を急いでいる。専門家の間では、オミクロン型に対する既存ワクチンの有効性は低下するとの指摘がある一方、重症化を防ぐのに一定の効果はあるとの見解もある。初のオミクロン型の感染例が見つかった日本でも1日から医療従事者らへの追加接種を開始し、第6波への備えを強める。(1面参照)



バイデン米大統領は演説で国民にワクチン接種の加速を訴えた(29日)IIAP



年齢下げ・間隔短縮も

バイデン米大統領は演説で国民にワクチン接種の加速を訴えた(29日)IIAP

米疾病対策センター(CDC)のワレンスキー所長は29日、18歳以上の人は追加接種を受けよう」と推奨する声明を出した。CDCはこれまで50歳未満の成人などに対しては「それぞれリスクと便益に基づいて受けることができる」としていた。

英国でも同日、ワクチンに関する独立委員会が40歳以上としている追加接種の対象を18歳以上に拡大すべきだとの勧告を出した。同時に、2回目

接種との間隔を6カ月から3カ月に短縮するよう勧告した。政府が近く判断する。ワクチン接種で世界的に先行するイスラエルでは4回目の接種に向けた準備を進めている。

オミクロン型には、ウイルス表面の「スパイク」というたんぱく質に30カ所以上の変異がある。スパイクのうち人の細胞表面のたんぱく質とくっつく部分は約15カ所に異なる。デルタ型ではこの部分に数カ所の変異しかなかったのに比べて多く、ワクチン接種者でも感染しやすい可能性が指摘されている。世界保健機関(WHO)は再感染のリスクが高いとみており、2回目の接種を終えた人の感染例も出ている。

オミクロン型に対する既存のワクチンの有効性については各国・機関で研究が続いている。長崎大学の森内浩幸教授(小児科学)は「オミクロン型への効果は今後得られるデータを基に判断する必要があり」と断った上で「オミクロン型ではワクチンの感染予防効果が下がると推定される」と言及した。

その上で「重症化防止の効果はオミクロン型でも残るだろう」と述べ、一定の有効性を指摘した。米国のファウチ首席医療顧問も「既存のワクチンで重症化をある程度予防できる可能性が高い」との見方を示している。

各国では追加接種の間隔を短くするなどして重症化リスクを抑えることに主眼を置き始めている。韓国や欧州連合(EU)では接種完了者に付与するワクチン証明書に有効期限を設け、複数回のワクチン接種を受ける国の模索が続く。

製薬各社は既存のワクチンがオミクロン型に有効か調査を進めると同時に、新たなワクチン開発にも取り組んでいる。ファイザーのブーラ最高経営責任者(CEO)は29日、100日以内にオミクロン型に対応したワクチンを出荷可能との認識を示した。